

京都発！ごみ減量情報誌

こごみ 日和77

京都市ごみ減量推進会議・会報誌 2018. 秋

特集：急増する観光客の陰で…ごみはどうなってるの？
～宿泊施設では今～

ごみ減会員さん訪問記「ごみ減の会員さんってどんな方？」：

株式会社ワコールホールディングスさん

Hand in Hand：地産地消を楽しみながら実践

～「西院」の小さな菜園から大きな人の輪をつくろう～

なごみ日和：3代目の大優勝旗

KBS京都 アナウンサー 海平 和



人と物と。織りなす「もっぺん」物語 第6回：

きものクリニック 悠遊舎

地域活動レポート：“脱・使い捨て”は地元の祭りから
リユース食器でごみ減量！

～京都経済短期大学 リユース食器プロジェクト～



台風や豪雨に負けず、
落ち葉のたい肥で作った野菜が
たくさん収穫できました。

でも、一番の収穫は集う人の「笑顔」でした。

「こごみ日和」は、京都市役所、各区役所・支所のエコまちステーション、
京都市図書館、京都生協（市内店舗）などで手に取っていただけます。

最新号・バックナンバーもウェブで公開中！ <http://kyoto-gomigen.jp/>

ごみにまつわるこの数字なあに？

海外
リサイクル率 **40%**

答えはWebへ！

※トップページ「よもやま話 ごみ減のごみ袋」
をご覧ください。



手をとりあって ごみを減らそう！

京都市ごみ減量推進会議

Q ごみ減

検索

急増する観光客の陰で… ごみはどうなってるの？

～宿泊施設では今～



「このごみ見てください」と奥村康夫さん

この街は今、戸惑いのなか。街を歩けば、行き交う観光客の群れ、トランクを引き歩き、スマホ片手に目的地を探すのは、どこの国からとの知らない人々、すれ違い様に聞こえるのは耳慣れない言語…。これは日常の風景なのだ。

5,362万人^{*1}。これが京都市を訪れる観光客数だ。

さて、ごみはどこへ？前号では、人気の観光スポットのごみを探った。2回目は宿泊を巡るごみについて追ってみた。

増え続ける宿泊客と施設 ごみが気になり

京都市を訪れる観光客のうち宿泊したのは、1,557万人^{*2}（実人数）で過去最高となった。それに伴い消費額も大幅に上昇し、1兆1,268億円^{*3}に達し、こちらも過去最高に達した。観光は、京都市の産業を支える柱といえるだろう。宿泊客を受け入れる施設としてはホテル、旅館、簡易宿所がある。簡易宿所とは、カプセルホテルなどのほか、京町家などの一棟貸しが含まれる。いわゆる民泊と呼ばれる施設を含むと、総計3,081施設^{*4}が宿泊客を受け入れている。

民泊とは「宿泊用に提供される個人宅の一部や別荘の空室などに宿泊すること」。これまでの旅館業法では対象外となり、今年6月「民泊新法」（正式には住宅宿泊事業法）が施行され、建物の規定、宿泊させる日数の範囲などが決められた。京都市でもこの法律に伴う、独自条例を制定し、72件^{*5}が許可認定を受けた。

さて、ここでごみに関わるどんな問題が発生しているのか…。民泊開設の勢いが止まらなると噂を聞いて、下京区の2つの地区を訪ねた。

ごみ出しルールはどこへ 菊浜地区で起こっていること



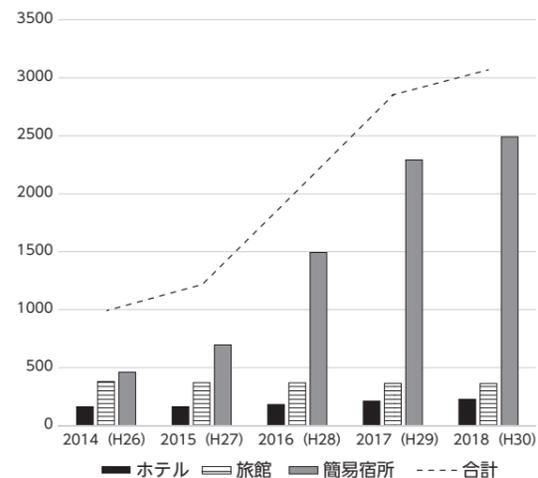
急速に変化する菊浜地区を案内する竹田宏三さん（左）、奥村康夫さん（右）

東は鴨川、西は京都のメインストリートである河原町、北は五条通から南は七条通まで。街の中央には、江戸時代、角倉了以が開削を手がけた高瀬川が流

れ、薪炭、米穀などの荷揚げ場、問屋が立ち並び、歓楽街ともなり賑わっていたという。街には当時の面影が色濃く残り、独特の風情を醸し出している。

京都駅からもほど近く、観光客にとっては魅力あふれる地であろう。ここには民泊や簡易宿所などが急増していると聞き、7月のある日、菊浜という街を愛し、ごみ減量をはじめ、まちづくりに奔走する菊浜学区ごみ減量推進会議会長の奥村康夫さんを訪ねた。挨拶もそこそこに「菊浜はどうなるのか」と、悲鳴にも近い言葉が飛び出す。聞けば、ごみ収集日には指定袋に重ねるように、観光客が捨てたとおぼしき袋が放出されているという。空き缶、ペットボト

宿泊許可施設数の推移（旅館業法に基づく）



※2018年（H30年）の数値は、6月末数値は速報値による
※簡易宿所に民泊は含まれていません。

- ※1 ※2 ※3…平成29年京都観光総合調査 京都市産業観光局
- ※4…京都市保健福祉局医療衛生推進室医療衛生センター（平成30年6月末速報値）
- ※5…京都市保健福祉局医療衛生推進室医療衛生センター 住宅宿泊事業審査担当発表（平成30年8月8日時点）

ルはもちろん、弁当の食べ残しなどもあり、「夏場は悪臭などが発生しないか」と、心配げな表情。回収日には、毎回、奥村さんたち有志が、清掃に回るのが実情と語る。民泊と思われる一軒一軒に、ごみ出しのルールを説明しにまわったりするが、管理者が不明であるなど、問題解決の手

街の変化を地域力で乗り切る 元梅逕中学校周辺への対応策

京都駅を真西に向かって歩くこと約10分。JR嵯峨野線の線路沿いの街も宿泊施設が増え、街の風景は急変している。表通りには洒落たミニホテル風の施設、細い路地を歩けば、電子キーが掛けられた京町家…。暖簾を揚げる家があちこちに見受けられる。「ごみなど問題は？」と尋ねると、「以前に比べ学校周辺での不法投棄などは少なくなった」と、梅逕安心安全ネットワークごみ減量推進会議会長の加藤純一さん。夜の巡回など、地域の結束力による活動が行き届いているようだ。七条堀川交番の管轄地区の防犯推進委員らが協力して、事故・犯罪防止などに取り組む中で、観光客による夜遅くのごみ出しなどに対応していることが功

だてに苦慮している様子だ。

鴨川沿いの通りを歩くと、つい最近まで住宅街だったのに、続々宿泊施設が開設され、筆者が通ったその日も工事中の家屋があった。宿泊施設急増とごみなどの問題発生に、菊浜の人々の行き場のない思いが伝わってきた。

を奏しているという。警察も関わる地域力でごみ問題に対処している例といえる。空き家が多かつたこの街だが、宿泊施設に利用されることで活性化するなかで、課題は「街の人々が活動を継続すること」と加藤さんは地区への思いも熱く語った。



取材に応じる加藤純一さん

段ボール箱も捨てられるが… どんなごみも受け入れるホテル

宿泊施設を代表するホテルなどでは、どうなのか？ JR京都駅近くのホテルに伺った。困っているごみとして、まず挙げたのが「段ボール箱や梱包材」。例えば、家電製品などを買い求め、中身を持ち帰り、「包装材はそのまま捨て置かれる」というケースが少なくないそうだ。見回してみれば、京都駅周辺には、大型家電量販店が立ち並んでいる。

さらにスーツケース類。新品を購入し、古いものを置いてチェックアウトという例だ。

その他、ペットボトル、コンビニ袋に入れた食べ残しなども排出されることがある。ごみ量としては増え、想定外の種類も出されるが、清掃業者との連携で対応している。「京都への観光客は今後、さらに増える」と予想するが、お国によって文化も違うので、どんな状況であれ受け入れたい。「廃棄物に関して処理が可能な体制だから」と締めくくった。

分別を徹底 3Rを目指す緑風荘

この記事の最後に、「しまつのこころ条例」に基づく宿泊施設のごみ処理として模範となる「緑風荘」を紹介しておきたい。トリップアドバイザーで京都市内のかなり上位にリストアップされるだけあって、ロビーで取材中の短時間に欧米系、アジア系の観光客がチェックインされた。ごみ対策においても前向きに取り組まれ、資源として、缶・びん・ペットはもちろん、雑がみも徹底して分別されていた。オーナーの姿勢でここまでできることを実感した。



プラスチックはもちろん雑がみなどしっかり分類。保管する緑風荘大野支配人

取材を終えて

宿泊施設をめぐるごみ。初登山でチョモランマに挑戦するにも似た気持ちで書き進んだ。あまりに広く、深いテーマ。しかし、観光に伴うごみについて、何らかの取組の実施が急務であることは明言できる。ごみがどれだけ排出され、どのように処理されているのか、実態を把握し、その対策を打ち出すことが重要であろう。なんらかのかたちで観光客への啓発活動も急がねばならない。行政だけでなく、市民、事業者、関連団体などが協働で取り組むことが求められる。京都という街が、戸惑いから覚醒するために。

宿泊に関する京都市の取組

京都市環境政策局ではごみ半減をめざす「しまつのこころ条例」に基づき、一定規模の宿泊施設に対し、ごみの適正処理の確認や指導をするほか、新たな営業の届け出の際、事業者に対しごみの分別チラシの配布など啓発を行った上で、後日、ごみを適正に処理したことを確認できる書類の提出を義務付けている。

さらに、宿泊税を財源として、違法・不適切な民泊に対する指導強化や、市民の様々な声を聞き、不安に的確に対応するため、民泊通報・相談窓口（075-223-0700）も開設された。市民と宿泊客の安心安全、地域との調和を大前提に、「民泊」のごみ問題をはじめとした諸問題の解決に取り組んでいる。

森田知都子（平成30年8月取材）



ひとり人のアクションが 社会にハッピーをもたらすものに ～「相互信頼」の環境活動

株式会社ワコールホールディングス

1946年の創業当初から変わることなく原点とされている、「相互信頼」の経営を行う株式会社ワコールホールディングス。「世の女性に美しくなって貰う事によって広く社会に寄与する」という目標のもと、時代の変化に柔軟に対応し、現在では50カ国以上の国や地域で愛され世界のワコールとして成長し続けています。「未来に約束 広がる笑顔と きれいな地球」をモットーとして、地球環境の保全をグローバルな事業活動で進められている、株式会社ワコール 人事総務本部 総務部のみなさんにお話を伺いました。



はじめりは女性の声から

「どうやって捨てる？」古くなったブラジャーを捨てる時、ごみ袋から見えなように工夫するなど、何かにくるんで捨てる人が多いのではないのでしょうか。

ブラ・リサイクルキャンペーンは、「ブラジャーを捨てることに躊躇することがある」とおおよそ6割の方からの回答があった同社の意識調査（2007年）を受け、事業活動と結びつけた独自の取り組みとして2008年からスタートし、毎年行われている活動です。期間中、店頭で配布されている専用の回収袋（ブラ・リサイクルバッグ）により、不用になったブラジャーを店頭で回収、産業用固形燃料（RPF）にリサイクルされています。

始めた当初は、回収対象を自社製品に限定していましたが、2012年度からはお客様のご要望に応え、他社製品もOKとしたことで、回収量は飛躍的に増加しています。2008～2017年度の間に回収したブラジャーは、およそ1,975,900枚。こ

れらは、約197.6トンのRPFに生まれ変わり製紙会社で燃料として活用されています。女性の声に耳を傾けたことから始まったブラ・リサイクルは、「捨てにくい」気持ちと環境への配慮を両立できる活動として、廃棄物削減だけでなく、CO₂削減にも役立てられています。



事業活動から日常までの環境活動をサポート

設計から、材料開発、そして生産・物流・販売までの商品の流れのさまざまな工程で、環境に配慮した多くの取組が積極的に行われています。2001（平成13）年、株式会社ワコールでは国際標準化機構（ISO）によるISO14001の認証を取得、事業所単位で環境マネジメントシステムを構築し、厳正な実施に努めるとともに、グループ企業でも、ISO14001やKESといっ

た環境管理システムの認証を取得しています。生産過程において、どうしても出てしまうレースなどの端材は、当会議の事業『愉快なおもちゃ箱』に提供いただき、参加した子どもたちは綺麗な素材に目を輝かせていました。

行われている取組は、事業活動に留まりません。社員の家庭において不用になった衣料品を回収し、NPOとの協働により、



社員食堂もエコ

多くの社員が利用する本社の社員食堂も、“食”を通じて環境のことを伝える「場」となっています。常に京都産のお米を使用し、食材もできるだけ京都産・関西産を取り入れるよう配慮されており、毎日の仕入れ産地はすべて掲示するなど、地産地消、地元への貢献も考えられています。

特に力を入れているのは、毎年6月の「環境月間」に提供されているエコクッキングメニューです。京都産の食材などを多く取り入れたメニューは、社員のみなさんから好評を得ています。「今年は、京都産の野菜を多く使ったカレーを提供したところ、通常のカレーの5倍もの喫食数があり、みなさんの意識の高さを感じられます。」とおっしゃるのは、毎年趣向を凝らした内容を検討されている小林さん。イベント時に限らず、スープに野菜のくずや、皮などを活用する使いキリの工夫は、メニューの横に掲示され、一目でわかるようになっており、社員食堂で食事を食べることが、直接環境活動につながると実感できます。

また、2016年と2017年には、社員の健康管理を経営的な視点で考え、戦略的に取り組んでいる企業として経済産業省の

みんなで取り組む環境活動

活動当初はごみの分別、OA用紙使用量削減、使用電力の削減などが中心でしたが、これまで紹介したように、現在では幅広く進められています。これらの活動は、すべてが事業活動の一環として、誰もが自然に取り組むことができる内容となっています。

「無理なく『環境』の取組に参加してもらうことで、意識を高めてもらっています」とおっしゃる崎川さんの言葉通り、社員だけでなく、社員の家族、商品を購入されるお客さま、みんなで取り組むことができる土壌づくりが行われていました。「グローバルな事業活動で地球環境を守る」ことを実践されている株式会社ワコールホールディングス。2019年11月の創立70周年へ向けて、今後の展開も目が離せません。

難民や被災者の方に届ける活動を、2004年からスタート。また2～3年に1回行われている「文具リユース」では、職場や家庭で使われていないものを回収し、事業所内でリユースした上で文具を必要としているフィリピンの子どもたちなどに届ける活動を行っています。さらに、家庭で不用になった本やCD、DVDなどを社内で回収し、NPOを通じて日本国内の子どもたちの学習支援につなげる「ありがと本回収」を、2014年12月から行っています。

事業活動だけでなく、家庭での取組への繋がりも、社員のみなさんが仕事としてだけでなく、日常生活においても自然と環境活動を進めることができる好循環を作り出しています。



「健康経営銘柄」に選定されており、健康を考慮した「GENKIメニュー」を提供するなど、社員食堂は多くの役割を担っています。



株式会社ワコールホールディングス本社 住所▶〒601-8530 京都市南区吉祥院中島町29
※本記事に関する問い合わせ先：株式会社ワコール 人事総務本部 総務部 TEL 075-682-1014

前田綾（2018年7月20日取材）



地産地消を楽しみながら実践 ～「西院」の小さな菜園から大きな人の輪をつくろう～

嵐電の西大路三条駅のすぐ近くにある高齢者福祉施設「西院」。玄関の前まで行けば、中で行われているレクリエーションの楽しい雰囲気が伝わってきます。今回は、この施設の2階にある菜園に注目し、楽しみながら地産地消を実践する様子を伺いました。

大切なものを大切に

「人に歴史ありと言いますが、私たちがお相手するのは、まさに人生の歴史を長く刻んでこられた方々なのです。」と、施設長の河本歩美さんは笑顔で施設運営に関する思いを語っていただきました。この施設では、通所介護、居宅介護支援事業、小規模多機能型居宅介護など、さまざまな事業を展開しています。そして、これらの事業の思いは、一人ひとりを大切に、「前向きに自分らしく生きていく」を応援すること。そして、利用者さんが大切にしてくれたことを一緒に大切にしていこうということ。「利用者さんから教えてもらうこともたくさんあります！」と河本さん。



施設長の河本歩美さん

よりも大事なことです。施設では、月1回多世代交流食堂（「おいでやす食堂」と呼んでいます）を実施しています。ここでは、利用者さんが提供する食事の下ごしらえをし、ボランティアの学生がシニアボランティアさんから料理を教わる機会もあるようです。また、子どもたちがシニアボランティアさんから昔の遊びを教わりながら楽しむこともあり

小さな菜園から大きな人の輪をつくろう

施設の2階には100㎡程度の庭があります。そこには底上げされた花壇がいくつかあり、地域の方や大学生らが利用者さんと一緒に野菜を育てています。今年は、この菜園の土に落ち葉コンポスト（醍醐寺の落ち葉から作ったたい肥）を使って、ホウレンソウやジャガイモを育てました。これまでに経験したことのない異常な豪雨と高温でどうなることかと心配でしたが、立派な野菜を収穫することができました。利用者さんの中には、土を触って昔を懐かしみ、大学生との会話を楽しむ姿もありました。

地産地消とは、地域で生産された様々な生産物や資源をその地域で消費すること。輸送の際にかかるエネルギー・CO₂排出量等を削減できることからエコ活動として注目されています。このように施設で育てた野菜を施設で食べることは、いわば究極の地産地消ではないでしょうか。環境にも配慮し、人の輪もつながっていく。小さな菜園には皆の笑顔が広がっていました。



地元の学生とジャガイモの収穫を楽しむ利用者さん

高野拓樹（平成30年8月8日取材）

高齢者が活躍できる機会を作りたい



シニアボランティアさんから遊びを教わる子どもたち

利用者さんは、今までの歴史の中で培ってこられた経験から手先が器用な人、お話しが上手な人、料理が得意な人、皆さんそれぞれに得意なものを持っています。このような「得意」を活かして、活躍する場をつくること、これが何

なごみ
日和



KBS 京都 アナウンサー
うみひら なごみ
海平 和

●●第19回「3代目の大優勝旗」●●

今年も全国高校野球選手権大会に夢中になりました。今年第100回の記念大会。京都からは龍谷大平安が出場。この節目の大会で、龍谷大平安は初戦で甲子園春夏通算100勝を達成し、15年ぶりのベスト16進出を果たしました。

全国3,920校3,781チームの頂点にたった優勝チームに授与される深紅の大優勝旗がこの夏、60年ぶりに新調されました。第40回大会以来3代目の大優勝旗。そんな大役を担ったのが、京都の旗の老舗、創業131年目、平岡旗製造株式会社です。

45年ほど前に高校野球との関わりが始まり、2代目の大優勝旗の修復も手掛けてきたそうですが、今回新調のお話があった時にはありがたい気持ちと同時に緊張感が高まったそうです。去年の1月から下絵を作り、糸を「これが深紅だ」と納

得がいくまで染めます。色が決まったら織る工程。熟練の職人が1人で半年かけて織りあげたそうです。そして仕立て上げるまで1年半。縦120センチ横150センチの大優勝旗が完成しました。

この1年半は非常に濃くわくわくする時間だったと振り返られた平岡成介専務。元高校球児だった平岡専務も大優勝旗への思い入れは強く、今できる最高の形で作り上げた自信を持って話されました。

高校球児はもちろん、全ての高校野球ファンが憧れる深紅の大優勝旗。2代目は修復されながら60年受け継がれてきたという重みを感じるとともに、3代目の大優勝旗もこれから長い時を超えて高校球児たちの夏を見守っていくのだなぁと考えると、なんだかわくわくしてきませんか？



海平 和：京都市出身、2010年KBS京都入社。テレビ「京スポ」「newsフェイス」、ラジオ「栢木寛照熱血説法こころのラジオ」などに出演中。

人と物と。 織りなす「もっぺん」物語



第 6 回

きものクリニック 悠遊舎

久しぶりに着物を着ようと筆箱を開けると…シミやカビが目立ちこのままでは着られない！という経験はないだろうか。今回訪ねた「きものクリニック 悠遊舎」は、着物の困りごとの相談に乗ってくれる頼もしい存在だ。

この日、着物の染み抜き職人 田畑秀幸さんは、カビによる黄変を元の状態に戻す作業をされていた。一カ所ずつ、汚れの具合を確認しながら専用の薬品を染み込ませ、蒸気を当て、乾燥させる。一度でシミが落ちない場合もあり、体力的にも大変な仕事だ。

長年、この仕事に携わる中で、印象に残っている依頼がある。母が着た振袖を、娘が成人式に着たいと言う。しかし、その着物は訪問着として仕立て直されており、再び振袖として着るには、袖を縫い直さなくてはならない。田畑さんは、ご自身のことを「染み抜き悉皆[※]」と呼び、着物を蘇らせるためにあらゆる手を尽くす。幸い、袖の保管状態は良く、縫い合わされた部分が目立たぬように金彩加工を施し、デザインのバランスを取るため着物の裾にも金彩で型染めを加えた。再び振袖として生まれ変わった着物を着て、母娘の感激は一入。この仕事は、京のお直し屋さん情報サイト『もっぺん』でも紹介され、ニーズが広がっている。

田畑さんは、シミの色を見た瞬間、「ああこうやったらうまいくなあ」とイメージが頭の中に浮かぶという。技術と経験に加え、依頼者の気持ちに寄り添う優しさによって、着物文化が守られている。

▶きものクリニック 悠遊舎 京都市下京区高倉通り松原上ル葛籠屋町511 ☎075-361-0212

※悉皆…京都では、着物の図案から染め、仕立てに至るまで、着物作りを総合的にプロデュースする専門職を指すことが多い。一般的には、染み抜きや立て直し等のアフターケアを請け負う仕事の意。

※一入…ほかの場合より程度が一段と増すこと。多く副詞的に用いる。いっそう。ひときわ。また染め物を染め汁の中に1回つける意味もあわす。



独自に開発した薬品で、シミを丁寧に抜いていく

松村香代子（平成30年8月1日取材）

“脱・使い捨て”は地元の祭りから リユース食器でごみ減量!

平成30年8月4日(土)、西京区で「リユース食器」を使った2つの夏祭りが開催された。会場で元気な笑顔を見せていたのが、京都経済短期大学『リユース食器プロジェクト(以下、リプロ)』の学生たち。毎年恒例となっている2つの学区の夏祭りに、リユース食器を導入することができた陰には、学生たちの熱心な取組があった。

課題は、リユース食器を地域に広げること

同大学は、学生が自主的に学習活動を行う「プロジェクト演習」があり、リプロもその一つ。環境経済学の小島理沙准教授が担当している。今年は「リユース食器を地域に広げる」という課題にチャレンジしようと、17名の学生が集まった。



お話を伺った小島理沙先生

この課題の背景には、イベントで大量の使い捨て容器がごみとなり、環境に負荷をかけているという現状がある。「地域のイベントで使われている使い捨て容器を、リユース食器に切り替えることで、イベントのごみを減らそうというのがリプロの目的です」と小島先生。

導入に向けた学生たちの取組

地元自治体にリユース食器を導入してもらうため、学生たちは2Rやリユース食器について学習することからスタート。リユース食器のレンタルや2Rの普及啓発活動をされているNPO地域環境デザイン研究所ecotoneの太田航平氏から特別講義を受け、さらに実際にリユース食器を使っているお祭りを視察した。

そして目的や意義をわかりやすく伝えられるよう、プレゼン資料のコンペと説明練習を重ね、福西・新林学区の自治連合会との交渉に赴いた。

どちらの自治会にも前向きに話を聞いてもらったが、導入にあたっては「使い捨て容器より高い」、「回収に手間がかかる」など費用と管理がネックとなった。そこで、管理については、当日リプロのメンバーが、食器の回収を中心にサポートを行うことに。そして費用は、市の「リユース食器利用促進助成金」を活用し、さらに、今回は授業の一環ということもあり大学側が一部費用を負担すること



リユース食器の専門家、太田氏の講義を受ける学生たち

で解決、リユース食器導入の実施に至った。

学生と地域が協働し、作り上げた夏祭り

当日、会場では、青いTシャツに身を包んだリプロのメンバーが食器・ごみ回収BOXの前に立ち、返却や分別を呼びかけたり、来場者にリユース食器をPRする姿があった。また、屋台周辺では、飲食を提供する際に「食器は返却してくださいね」と声をかける姿も。食器を屋台に返却する人が相次いだことから、入口付近にあった回収ボックスを屋台脇に移動する場面も見られた。



屋台ではリユース食器で飲食物を提供(福西会場)



使い終わった食器の回収風景(福西会場)

学生たちは、リユース食器の紛失が出たことを失敗点としながらも、「ごみが減量できた」、「散乱ごみが出なかった」、「リユース食器に興味を

もってもらえた」ことなどを挙げ、今回の活動に一定の達成感が得られたようだ。また、地域の人々との関わりに、「楽しかった」、「対人スキルが鍛えられた」、「人に説明することの難しさを感じた」といった学生らしい感想も聞かれた。

最後に、小島先生から「今後も続けていくことに意味があります。一人ひとりがこの取組を“自分ごと”として捉えられるようになれば、自ずと“リユースが当たり前”の社会になると思います」とお話があった。今後は地域を拡大したり、他大学と連携して学園祭にリユース食器を導入するなど、さらに共感の輪を広げていきたいと次なる目標に向けて動き出している。



食器回収を通して、住民と交流する学生たち(新林会場)

藤原幸子(平成30年8月4日取材)